

**サミュエル・アデルスタイン**

**Samuel Adelstein**



### アデルスタイン氏について

米國太平洋海岸に於て初めてマンドリン教授を行つたものは西班牙生れのフェレル（ホゼ・フェレルとは別人）と同じくロメロ及びアデルスタインの三人である。即ち彼アデルスタインは米國人中の最先覺者であつたと云はねば成らない。彼はマンドリン研究の爲にわざわざ歐洲を訪れ、ムニエル、ベルレンギ等の教をうけた。そして一方教師として大なる努力をなすと共に又屢々自分の見聞記、研究談等を發表した。此處に發表するものは孰れも千九百一年に書かれたものである事に特に記憶して戴き度い。即ち文中には、所謂過渡期から勃興期に移らうとした當時のマンドリン界の狀況が誠に興味深く讀まれるのである。

同人が日本を訪れた事のあるのは興味を以て見るべきである。

## 手記

過去二十年間にマンドリン程歐米各國に急速に一般に廣まつた樂器はあるまい。英吉利及び獨逸では數年前迄は殆んど此樂器は知られて居なかつた。佛蘭西でも僅かの人を知つて居るに過ぎなかつたのが今日は夫れを彈奏するものが數千人もあつてマンドリンが立派な樂器である事が明になつた。今や佛蘭西には數限りないマンドリン俱樂部が國內各地に出來た。英吉利にはマンドリンバンド、獨逸にはマンドリン、オーケストラ夫々多數にあり、南米の大都市には非常に流行し遠くオーストラリヤ迄も知れ渡り伊太利では有力なマンドリン合奏團が有つて有名な獨奏家は歐洲各地で演奏會を開く様になつた。又巴里には音樂院でマンドリン科を設ける様になり教へきれない程生徒が澤山ある。

數年前迄は倫敦巴里伯林ではマンドリンの樂譜は絶対に出版されて居なかつたのに今日では優れた作曲家の手になつた立派な譜出版され而も其の多くはマンドリンに對する獨奏の曲である。又マンドリンオーケストラの譜も澤山に出來た。二十五年前迄はマンドリンの生れた伊太利でさへ此樂器は少しも注意を拂はれず秩序もなく唯なぐさみに彈奏せられたのみであつた。一八九一年七月に伊太利で出版せられた有名な獨奏家の著した教則本の序文に下の通りに書いてある。

『今より十二年前に此教則本を出版してもマンドリンは少數の人が知つて居るのみであつた故に何の用にも立たなかつたであらうが、今日は熱心に研究するものが澤山出來て此の種の本が必要となつた云々』其の頃は伊太利でも未だ眞のマンドリン曲は多く出版されて居なかつた。あつても總て平凡のもののみであつたが現今は其状態が全く一變した。米國の太平洋沿岸ではギタリストのマヌエル・イ・フェレールとルイ・ロメロと予との三人が最初のマンドリンの教師であつた。當時樂譜の出版されたものもなく茲に書くほど有名な樂器製造所もなく、ロツキー山以西には殆

んど教師はなかつた。然るに今日では教師の數は何百人、樂器製造所や樂譜出版者は多數、之を彈奏する人に到つては國內到る處に見出される様になつた。米國の樂器製造所が現今の如き優良な樂器を作る様になる以前にはマンドリンは凡て伊太利へ注文せられ樂譜も同國から取寄せたので伊太利人も此美しき國民音樂を忘れて居たのに氣附いて夫れ以後は樂器製造所は熱心に其製造に著手し獨奏家や合奏團は到る處に奮起し出版業者はマンドリン樂譜を續々出版する様になつた。マンドリンが始めて米國に紹介されたのは今を去る二十一年前即ち千八百七十九年にマドリッドから渡米した西班牙の「フキガロ」學生團のバンドウリア合奏が其の因をなしたのである。此の時から暫らくの間西班牙の學生團が演奏したのはマンドリンであつてマンドリンは西班牙特有の樂器である様に米國の人々が思ひ誤つて居た。一八九五年に予は西班牙へ渡つてデブラルタル、ロнда、セウイラ、又はコルドヴァで熱心に調査したが遂にナポリ型マンドリンは發見する事が出来なかつた。西班牙の學生が使

用したのはマンドリンの如くトレモロで弾く處は似て居るが其他の點は相違して居るドン・ファンが掻き鳴したバンドウリアであつたのである。此の西班牙のフキガロ學生團は團員凡て二十二名、其指揮者は「エル・トゥリア」圓舞曲を作曲したデニス・グラナドで一八七九年マドリッドから米國へ來つたのである。使用した樂器はバンドウリア十三個ギター七個、ヴァイオリン一個及セロ一個等であつた。彼等は一八八一年に西班牙へ歸つたが翌年再び故國を立つてメキシコへ渡つた。其の時は人數は十八名でガルシアが其の指揮をした。彼等は米國へも現はれ桑港で演奏をなし次に一八八五年には南米のブエノス・アイレス市へ向つた。此西班牙學生團の演奏が人々に非常に感動を與へて紐育に居る伊太利人が合奏團を組織する様に成つた。之等の伊太利人は音樂専門家ではなく色々の職業に従事してゐる人々であるが彼等は娛樂としてマンドリンを彈奏して居たに過ぎず紐育でも伊太利人町以外には知られなかつたのである。それが合奏團を組織して西班牙學生團と同じ服裝を着け

團體の名義も同じフキガロ學生團と稱し團員の姓名迄も眞物の西班牙學生團員のを附けて居た。斯くして兩方の合奏團が國內各所で演奏しつゝあつた時に或る日某地で雙方が計らずも出逢て氣早の西班牙人と伊太利人が危く衝突する處であつた。伊太利人の團員は皆ナポリ型のマンドリンを使用して之れ亦非常の成功を納めた。眞物の西班牙合奏團が本國へ歸つた後では此の團體が解散して各自諸々に引き別れた。

之等の伊太利人が持つて居た僅かのマンドリンの外に米國へ移住して來る伊太利人が多少マンドリンを持つて來た。又米國人で歐羅巴へ漫遊した序にマンドリンを本國へ持ち歸り等して次第にナポリ型マンドリンが徐々に然し確實に米國へ廣まつたのである。暫くして此リウト族の美しい形狀を備へた樂器の其金屬線から發する可愛らしい音が音樂好きの人々に非常に同情を得たのであつた。ヘクトル・ベルリオーズは彼の著書「近代の器樂及び管絃樂編成」中にマンドリンを正當の樂器と述

べて居るが正に夫れに相違ない。モツアルトの歌劇「ドン・デオザアンニ」中の小夜曲「デ・ザキエニ」はマンドリンの伴奏をもつて居る。ベエトーヴエンもマンドリンの爲めに作曲して自署した、其自筆の譜は英國博物館に保存せられてある。「マンドリンのソナティナ」がそれである。ベエトーヴエンの友のクルムフォルツはマンドリンの大家であつたので多分此の曲を作つたのであらう。ヴェルデイの「オテロ」中の小夜曲もマンドリンの爲に書かれてある。

一八九五年三月十一日に私は幸にも羅馬のコスタンツイ座でニコラ・スピネルリの新作になる歌劇「ア・バツツ・ポルト」の初演を見る事が出來た。此の時は非常な人氣で伊太利皇帝、皇后兩陛下にも劇場へ臨まれ羅馬の貴族高官が皆來場した。此の歌劇は「カザアルレリア・ルステイカーナ」と稍同じ形式を帯びた愛と嫉妬を主とした悲劇であつた。音樂は非常に美しく各樂器の配合が巧みに出來てゐた。就中最も觀客に感動を與へたのはスピネルリが此の歌劇の爲めに特に作曲したマンドリンの

獨奏曲で之れは羅馬のマンドリン名手、マルドウラがオーケストラの伴奏で演奏して非常の喝采を博し數回禮奏を續けた。

元來マンドリンは大古の撥を以て弾くリウイトから其原を發して伊太利で初めて作られた樂器であるが同國でも漸く凡そ二十五年位前から盛になつたので其以前は伊太利國外には知られて居なかつた。私は一八八〇年五月十日にフロレンスで開かれた演奏會の古いプログラムを同地の勝れたる作曲家ベルレンギから贈られたが之れに依つて見るに曲目中重要なるものはマンドリン十個とギター八個で齊奏せられた『レヴェニリー』と『フィオリンテイネラ』ポルカで今より見れば實に平易な曲のみであつた。

然しマンドリンは伊太利に非常の勢力を以て流行し上は皇后陛下より下は憐れな乞食に至る迄各階級の人々に據つて弾かれた。斯くの如くマンドリンが皇室の愛玩樂器となつたので貴族間にも非常の流行を見るに至つた。大都市には名樂手のみを

以て組織せられたナルコロ(合奏團)が澤山出來、又演奏競演會では多勢の的となつて居るコンファロネ即ち絹製の見事な優勝旗を得る爲に伊太利北部地方からはミラノ風即ちロンバルディア式のマンドリンを持つて集り中部地方からはローマ風マンドリン又南部地方からはナポリ風マンドリンを持つて續々と競技演奏會に加はる様に成つた。

ナポリ又は其の近郊へ赴くと日夜殆んどマンドリンを聞かぬ事はない。ナポリ港に出入する汽船の周圍から小舟に打ち乗り集つて來る澤山のマンドリンの奏手は甲板から船客が投げる小錢を帽子や傘で拾ひ受け大きな旅館には之等の大道音樂家に依つて旅客は夜中セレネードを聞かされ爲に漫遊客の多く來る季節には殆んど安眠も出來兼ねる程である。ナポリからカプリに行く船中にマンドリン二人とギター一人の三部合奏團が乗込んで居てナポリ民謠『サンタルチャ』『アデイオ・ミア・ベラ・ナポリ』『フニコリフニコラ』『オー・マルゲリータ』等を弾き且つ唱つたがヴェス

グイヤス山とボンベイとを背景とし遠く遙かに美しいカブリを望んでナポリ灣上に此の優美な音楽を聞いた時には何日迄聞いても倦きる事はあるまいと思つた。ソレントのトラモンターナホテルにはタランテラ踊の名人が數多居て、巧妙なマンドリンオルケストラに合せて踊つてさへ居た。

今より十七年程前には桑港では殆んどマンドリンを得る事が出来なかつた、人々は此の樂器を骨董品の如くに思ひ樂器商さへ無頓着の態度であつた。其の當時米國でマンドリンを持つて居たものは歐羅巴歸りの友人から貰つたもので非常に幸福な人とされて居たものである。或る時音樂會でマンドリンの獨奏があると云ふので聽衆一同は如何なる音を發するものかと好奇の眼を以て迎へた。其の彈奏した處の曲は至極平凡なものでトレモロは實に聞くに堪えなかつたに拘らず人々はマンドリンとは美しい音をもつた樂器であると感じた様であつた。一日私は或る樂器店へマンドリンが有るかと訪ねて見た。幸ひ一個ギターの如きフラットバック型の有つた

が店員はマンドリンに關する知識は少しもなかつた。丁度調子が合つて居たので私はマンドリンを取り上げて試みに弾いて見た處がフィンガリングがヴァイオリンと同じである事が分つたので大した努力を要せず弾く事が出来た。

一八八七年に故ルイ・ロメロ氏と私は米國の太平洋沿岸最初のマンドリン俱樂部を組織し「オルフェオのリラ」と命名した。樂器はマンドリン、ギターにヴァイオリンとセロが加はつて居た。第一回演奏會を一八八八年五月二十四日に有名な洋琴家アルリラガの指揮に依つて開いたが其の時の曲目は左の通りであつた。

セレネード・ヴァルス・エスパニョーレ

メトラ作曲

ペラ・マヅルカ

ワルドトイフェル作曲

エル・テユリヤ・ワルツ

グラナド作曲

シルヴィヤ中のピッツィカートイ

デリベス作曲

ラ・ガチエビナ(玖馬の舞踏曲)

アルリラガ作曲



一八八五年に私は『イル・マンドリナ・マツルカ・エス・バニョーレ』を作曲して出版した。之が米國に於てマンドリン曲の出版せられた第二回目であつた。引續き各方面から色々の譜が出版されて漸時今日の如く隆盛に赴きアプト、シーゲル、ベツティネ、レオン等がデュオ奏法をもつと完全の域に進めた。歐羅巴では巴里のメツツアカーボ、クリストファロ、ビエトラベルトーザ、コツタン兄弟、パティエルノ、タラモ又伊太利では、ムニエル、シルヴェストリ、ベルレンギ、ロヴィナツツイ、ブランツオリ、グラチアーニ、ワルテル、マテイニ等の錚々たる人々が數多作曲した。

私はヴァイオリンの弓の上下使用法をマンドリンのピックに應用したが其の當時是等の點に就いて尋ねるにも師を得る事が出来なかつたので私はマンドリンの眞の研究を行ふ爲には本場の伊太利へ行かなければ駄目であると氣が付いて遂に一八九〇年に第一回の旅行を伊太利へ企てたのであつた。

一八九〇年に私は眞のマンドリン研究の爲め遂に伊太利へ渡つた。其途次先づ佛蘭西へ赴き巴里にビエトラベルトーザを尋ね彼の率ゐる十人のマンドリニストと二人のリューティストから成る合奏團の演奏會へ臨みポイトの作曲した『メフェイス・フエレ』中の小夜曲を聞いた。次で愈々目的地伊太利に入り紹介狀を以てフロレンスのベルレンギ、ムニエル、グラツアーニ、ワルテル、マテイニ、ダジエニに面會し次に羅馬ではブランツオリ、コンテイ、タルタリアに、又ネーブルスではカラッチエ兄弟とデラ・ローザとに逢つた。之等の人々は何れも當時伊太利一流のマンドリニストであつて私が遙々米國から教授を受けに來た事に對しては皆驚いて居た様である。

私は幸にも一八九〇年四月にフロレンスで開かれた「皇后マルゲリタ陛下マンドリン俱樂部」の演奏會を聞く事を得た。此の俱樂部は一八八一年三月に組織せられ

て以來今日に至る迄演奏會を開催した數が實に百五十回で、皇后マルゲリタ陛下が此の會を贊助せられたるに依つて皇后の御名を其の俱樂部名に戴くのである。皇后陛下はマンドリンの技術に非常に優れたさせられ其愛用せらるゝマンドリンは價格三千圓と稱せられて居る。

私がフロレンスを出發する前に此の俱樂部は一夕同市のカピタニ料理店に於て私の爲に別宴を開いて呉れた。食後各自會員が持參したマンドリン、マンドラ、リュート、ギターを以て合奏をなし誠に愉快な一夕を過した。席上ムニエル、パリニ、マティニ、ピッツァアリの四氏はベートヴェンの絃樂四部曲をマンドリン二個とマンドラ、リュートを以て美事に演奏したが私は斯かる曲がマンドリン族の樂器を以て斯く迄に意味深く演出せられ得るものと只管驚嘆したのである。私がフロレンスに滞在中にグラツァーニ・ワルテルは第一第二マンドリン、マンドラ、ヴァイオリン、セロ及ハープに彼が美しく編曲したガスタルドンの有名な「ムジカ・ブロイビ

タ」の原譜を私に贈られた、又ダジエニは無言歌「タモ」を第一第二マンドリン、マンドラ、リュート、セロ、ギター、リュート及ハープに作曲して私に贈られた。

一八九〇年に私が始めて皇后マルゲリタ陛下マンドリン俱樂部の演奏を聞いた時には男女會員合せて七十人程であつたが一八九二年のゼノア博覽會で催された全國マンドリニスト大會の演奏會には四十五人だけであつた。恐らく優れた彈手のみを集めたのであらう。此の時の使用樂器はナポリ型及ローマ型マンドリン二十四、ロムバルデイ型マンドリン九、ロムバルデイ型リュート一、ギター七、ハープ二、セロ一、オルガン一、ティンパニー、ドリツカルド・マティニが指揮をした。(彼は私の爲めに夜曲「フロレンスの紀念」を作曲した。此の曲は第一第二マンドリン、マンドラ、ギター及びピアノに作られてある)。此の大會には伊太利全國のあらゆる優れたマンドリン獨奏者やマンドリンオルケストラが出席したが第一等金牌と絹製の優勝旗ゴンファアロネは遂に皇后マルゲリタ陛下マンドリン俱樂部の手に落ちた。

一八九七年私は其の當時此の倶楽部の指揮者であつた、グラツィアーニ・ワルテルから第百三十八回演奏會のプログラムを受取つた。夫には一八九七年五月三十一日皇帝皇后陛下の御臨場を仰ぎ、サルヴァイニ皇室劇場に於て開催する旨が記されてあつた。曲目は全部指揮者グラツァーニ・ワルテルの作曲或は編曲したもので(一)抜萃曲「ノルマ」、(二)マンドリンオルケストラ伴奏附セロ獨奏「レズレ」(三)合唱及マンドリンオルケストラ伴奏附ソプラノ及テノール合唱「レジエンデ・ヴェネチアナ(四)」「村里組曲」(五)「ラボヘム」等であつた。此のプログラムに記された曲を一八八〇年ベルレンギの指揮の下に演奏された合奏曲目と比較すれば實に隔世の感がある。

私はナポリで有名なマンドリニスト、ニコラ・カライチエの指揮した立派な合奏團を聞いた。此の團體にはマンドリニストとして有名なフランチェスコ・デラ・ロイザと世界的リュートの名手ラツファエーレ・カライチエも加はつて居た。カライチ

エとデラ・ロイザとは私の爲にマンドリン二部合奏を演奏されたが實に美事な出来であつた。ニコラ・カライチエは私に「ヴィア・ラツテア」を作曲して其の原譜を贈られた。元來歐羅巴では作曲者から原譜を贈られる事は非常に名譽とせられて居るのである。

凡そ十一年程前には巴里のマンドリン界は實に微々たるものであつた。當時大オルケストラと稱されたピエトラベルトーザの團體さへ僅か十人か十二人の人數であつたに過ぎない。然るに一八九九年に私が佛蘭西の大マンドリニスト、ギタリスト並に作曲家たるコツタン兄弟の一人アルフレッド・コツタン氏から受取つた書簡に依ると今は五十八人から成る大オルケストラを組織して「アルボラダ」を或る演奏會で演奏したさうである。此の曲はコツタンが私にデディケートしたものである。

此の演奏には第一マンドリン十五人、第二マンドリン十四人、第一マンドラ四人、第二マンドラ四人、リュート三人、セロ二人、ギター十四人、コントラバスギター

(キタローネ)一人、及びダブルバス一人であつた。

マンドリンは次第に東洋へも紹介された。私は一八九五年に埃及のカイロ市に趣いたが其一月二十八日コンチネンタルホテルでブリーゼ教授に依つて催された音楽會に臨んだ。マンドリン二十人、マンドラ一人、ギター三人、コントラバス一人より成るスフィンクス合奏團も之に加はつた。其の曲目は次の通りである。(一)合奏ブリーゼ作「ビエデイロツタ」(二)マンドリン獨奏デ・ペリオ作「グラランド・コンチエルト」百四番(三)、第一第二マンドリン、マンドラ、チツアト、ギター、五部合奏(イ)「セレネード・エスバニョーレ」(ロ)「カヴァレリア・ルステイカナ」(四)同上五部合奏スツベ作序曲(五)高音獨唱マンドラオプリガイト附ボラニ作「イル・ソ・ニョ」(六)合奏ブリーゼ作「ラ・グラン・ヴァイア」。

一八九一年に私は桑港の一大會館メトロポールホテルで大バイブオルガンの伴奏でマンドリンの獨奏を試みた。聽衆は皆斯かる大きな會場で加之バイブオルガンの

伴奏では到底マンドリンの音は聞えるものではないと信じて居たが伴奏者がストツプを巧みに使用したので此の試演の結果は大成功であつた。續いてマンドリン、ヴァイオリン、フリユート、セロ及ハープを以て、グラツァーニ・ワルテルの「ムジカ・プロイビタ」を演奏して再び賞讃を博した。

一八九二年にオレゴン州のポートランド市で同地最初のマンドリン音樂會を開いた。翌一八九三年の夏にはアラスカへ旅行してシツカに於て音樂會を開いた。同地方では夏の日は殊に永く午後九時に開會して十一時に閉會する迄燈火の必要がなく戶外では新聞さへ読み得る位であつた。一八九三年に私はコロンビア博覽會で各種の樂器を親しく調査し一八九四年に世界漫遊を思ひ立つて先づ布哇へ向け故國を出立した。

一八九四年に私は世界漫遊にと故國を立つて布哇へ寄りホノル、に二箇月、ヒロに一箇月滞在した。七月十七日ハワイアン・オペラハウスで演奏會を催し、ヒロの

コートハウスでも四月四日に同じ様に開いた。布哇の土人は音楽を非常に好み同島固有の樂器としてウカリリとタロバツチの二種がある。此の樂器に就て少しく説明を試みるのはマンドリニスト及ギタリストたる諸君に對して強ち無益の事ではあるまい。此のウカリリとタロバツチは何れもギターを小さくした様な形狀でウカリリの方がより小型である。ウカリリは長さ二十吋一番廣い部分でも幅は五吋半あるのみである。フキンガーボードの長さは六吋半でフレットの數が十二、A、E、C、Gのガット線四本が張られてある。タロバツチは稍大きく長さ二十七吋、一番幅の廣い部分が八吋半、フキンガーボードの長さ九吋フレットの數がウカリリと同じく十二、A、E、C、G、Dのガット線五本が張られてある。此の樂器の音域は非常に狭いので主に布哇の美しい優しい歌の伴奏として奏でられ、ソロは殆んど聞く事がない。此の樂器を弾くには右手の使用法が非常に難しくギターで太鼓の模倣をするのと稍同じ方法で指の爪の脊で打ち下ろし、指先の柔かな部分で打ち上げ殊に困難なのは

手首を妙に丸く動かす事である。土人のフラフラ踊りを始めとして凡てのダンスはウカリリとタロバツチの伴奏に依つて唱はれる歌に合わせて踊られるのである。

一日私は布哇第一の社交舞踏會を見たが純白の服を著た土人がウカリリ、タロバツチ、ギター、フリユートを奏し且つ唱ふに合せて人々が踊つた。全くウカリリやタロバツチは伴奏樂器に過ぎないのである。

布哇を立つて私は日本其他の東洋諸國を経て一八九五年の春に伊太利へ着き五年前の友人等と再び握手した。(日本訪問記は次稿に掲ぐ)

ヴァイオリンは樂器中の王と言はれて居る。ヴァイオリンとマンドリンとが同じ様であるのでピエトラベルトはマンドリンを指して「王の長弟」と言つたが蓋し適評である。ヴァイオリンとマンドリンとは其の調子の合せ方、音域、左手の扱方等が相似て居る事は事實であるが、今兩者を比較するのは不可能である。兩樂器共ボジションを替へる時に左手に非常の注意を拂ふは勿論の事であるがマンドリン

には一對の鋼線が強く張られて有るので美しき明瞭な音を出すにはフレットの上面に絃を強く押へなければならぬ。随つて力を要する事はヴァイオリンの比でない。多くのマンドリニストはブリツヂの高過ぎるのやフキングボードの曲つたもの又はネックの反つたのや絃の太さの揃はぬ事に注意せず餘計に骨を折つて居る様である。然るにヴァイオリンは柔らかかなガット線であるから壓へるのに斯る困難を感じない。其上ヴァイオリンはスラーを奏する場合にフキングボードに妨げるものがないので滑らかに使ふ事が出来る便利がある。右手に就て言へばヴァイオリンの弓の使ひ方は比較するものがない程音楽の技巧中困難のものと云はれて居るがマンドリンのピックの使用法も亦中々至難の業である。私は兩樂器を多年學んだ経験からマンドリンの方がヴァイオリンより仕遂げる事が困難であると斷言するに憚らな

5。

マンドリンはフレットがある爲に初學者にも調子を外す事なく簡単な曲は容易に弾く事が出来るが進んで深く研究すればする程難しく、始めに思ひ及ばぬ様な至難な演奏法があるので多くの人は皆な一驚を喫するのである。然し又美しいハーモニー迄も弾けることが解れば練習に骨を折る價值のある事は十分會得するであらう。ヴァイオリニストは弓を一度絃に當てれば何程急速な調でも容易に弾く事が出来るがマンドリニストは明瞭な音を出す爲に種々違つたピックの使用法を應用して各音を一々打たなければならぬ。ヴァイオリニストは兩樂器共其のフキングボードが同じ様であるから始めは何の困難もなくマンドリンを弾く事が出来るが伊太利式のピック使用法を學ばなければ少し進んだ曲を弾く事は出来ない。正確にマンドリンを弾くにはピックの使用法が一番困難な事であつて之が爲め多くのヴァイオリニストがマンドリンを持つて失敗するのである。彼等はマンドリンがピックを以て二本の絃を同時に打つと云ふ事を念頭に置かず只ヴァイオリンと同じ方法を以て弓の上下をピックの上下に應用して居るのである。斯くては到底滑かな明瞭なる音を出

す事は望めない。調子の急速の場合には殊に左様である。

先づトレモロが出来る様になつたならば次にはビツクの使ひ方が一番大切である。然るに其の點は佛蘭西式と伊太利式とは根本から相違して居る。私は佛蘭西式を六年伊太利式を十年研究した結果遂に伊太利式を選んだ。佛蘭西のメソッドには左手の使ひ方は極めて詳細に書かれて居るが、最も必要とする右手に就ては等閑に附して居る傾向がある。又書いてあつても往々間違つて居る。クリストファロのメソッドにも三連音の弾き方以外には何も説明を試みて居ない。コツタンも彼の名高いメソッド中に急速調の場合はヴァイオリンの弓の上下と同じ方法でビツクを使用する事を説明してゐる。總て佛蘭西のメソッドは此の點に於て全然ヴァイオリンのメソッドと異らないのである。其の中で唯一人メツツアカーポのみは彼の作曲したものに伊太利式を用ひて居る。

私は幸にも羅馬でプランツオリから親しく彼の著したメソッドに就いて教授を受ける事を得た。彼のメソッドを基礎として各國に於てマンドリンのメソッドが出版せられたものと私は思ふ。プランツオリのメソッドは數版を重ねた後兩三年前此の老作曲家に依て再び訂正増補せられた最新版が發行された。此の書にはビツクのあらゆる使用法が説明してある。彼は此の外「ラ・スクオラ・デイ・ヴェロチタ」(速かなる技巧の練習)上下二巻を著した。其の上巻には長短兩音階各調に亘り速度の練習曲四十八曲を載せ下巻には各ポジションに於ける速度の練習曲四十曲を載せてある。

私はフロレンスのジユゼツペ・ベルレンギに就いて彼のメソッドに依り親しく教授を受けた。此のメソッドは彼が一八九二年のゼノア博覽會に於けるコンコルソに銀牌を得たものである。左手の使用法に就いては説明詳細を極めて歐羅巴に未だ會て見ない良書である。彼が作曲したものは數多あり、又皇后マルゲリタ陛下マンドリン俱樂部の名譽指揮者である。彼の作曲した大曲は總て本名のベルレンギを用ひ

てゐるが小曲には、ジ・ビー・ピラニの號を用ひて居る。彼はベルレンギの名で私に「ウーナ・ステルラ・セレナータ」を作曲して贈られた。又ジ・ビー・ピラニの名で「ドレミア・ボルカマルチア」を作曲して贈られた。何れもマンドリン二個マンドラ、フリユート、セロ、リュート、ギター及びピアノに書いてある。

私が最も幸運であると思つて居るのはフロレンスの大マンドリニスト、カルロ・ムニエルに就いて日日親しく彼の教授を受ける事が出来た事である。彼は一八九二年のゼノア博覧會で最も優れたるマンドリニスト及び作曲家として第一等金牌と褒状を得た、彼は皇后マルゲリータ陛下マンドリン俱樂部の名譽會員に選ばれ又クアルテット・ア・プレットロ・フィオレンティノ（フロレンス・プレクトラム・クワルテット）の指揮をして居る。此の四部合奏團は第一マンドリンがルイジ・ピアンキ、第二マンドリンがグイード・ビッツァーリ、マンドラがリツカルド・マテイーニでリュートをムニエルが受持つて居た。

私はムニエルが當時將に出版せんとして居た彼のメソッドに依つて日々彼の教を受けた事は稀に得られる幸福である。今も常に感謝して居るのである。此のメソッドにはピツクのあらゆる使用法が完全に遺漏なく説明せられてあつて竝ぶものなき良教則本である。ピツクの二三の使用法の外知らぬ我がヴァイオリン式マンドリニストが四十幾通りも異つた使用法のある事を聞いたならば殆んど驚倒する事であらう。

初學者には各種のピツクの使用法は初め頭を悩ますが倦きずに徐々注意深く學べば始めに込入つて居たと思つた事も何時か容易に出來得る様になり、始めてマンドリンを完全に彈奏するには伊太利のメソッドに據る必要のある事を了解するであらう。

伊太利では三種のマンドリンが使用せられて居る。第一に吾々の現に使用して居るナポリ型、第二にローマ型、第三にロンバルド型である。又マンドリラと稱され



る新型もある。此の他マンドラ、マンドロンチエロ、(一名近代リウイト)及びリオラ等がある。今此の順序に従て各樂器に就いて一通り説明を試みたいと思ふ。(譯者曰。彼はマンドロンチエロと現代リウイトとを混同して書いて居るが此當時は事實混同して居たのである)。

ナポリ型マンドリンは伊太利を始め歐米各國によく知られて居るから茲に説明を要せない。ローマ型マンドリンは主に羅馬又は伊太利中部地方で用ひられ胴の形狀は殆んどナポリ型と同じで只ネックの脊面が稍尖つて居る。頭部は後ろへ四十五度の角度で曲つてヴァイオリンの如き木のベツグが用ひてあるので調子を合せる事が非常に困難である。又或るものはギターの如き螺旋が側面に着て居る、此のマンドリンはテューニングも彈奏の方法もナポリ型と同一である。只相違して居る點はフキンガーボードがヴァイオリンの如く丸味を帯びて居てE線の部分はサウンドホールの上に一時程突出し、ブリツヂは傾斜してG線の方が高く次第にE線の方へ低

くなつて居る。G、D、の兩絃にはフレットの數が十八あつてA絃に十九とE絃に二十三ある。G、Dの兩絃は太い銅線を捲き付けた鋼線である。此のローマ型マンドリンは屢々鶯鳥の羽莖で作つたピツクで彈奏せられるのである。

ロンバルド型マンドリンは主にミラン又は伊太利北部のロンバルディ地方で使はれて居る。之れは前に述べた型とは餘程相違して居る。形は短かく幅が廣い。絃は六本あつて内三本はガットを用ひ他の三本は絹に鋼線を捲いたものを用ふる。テューニングはG D A G B Gの順でヘッドもネックも同一の木から出來て居てヴァイオリンの如く木製ベツグを使用してゐる。ネックはナポリ型やローマ型より幅廣で短かくフレットの數は二十個ある。サウンドホールはハート形をして居て絃はギターの様にブリツヂに結び附けてある。見た目には美しいが、其の音は到底ナポリ型とは比較が出来ない。各絃は一本宛の單線でガットや絹の卷いたものである上に長さが凡そ一時も短い故に一對の鋼線の様に美しく明瞭に振動しない。又平均したトレ

モロを得る事も困難である。

マンドリラはナポリの樂器製造者に依つて近頃試みに作られた新しい樂器である。胴の裏面は丸く脹み表面は平たくリラの様に兩翼があつて夫れがヘッドの方迄も横がつて翼の一端から鐵の棒でヘッドの下部に取り附けられてある。テューニングも彈奏法もナポリ型マンドリンと全然同一である。マンドリラは從來のマンドリンを改良して作つたものと稱するが各國で氣まぐれに作る樂器の一に過ぎないのである。此の樂器の製造者は「音は優美にして且強大、二個のマンドリンを同時に弾くが如し」と云つてゐる。マンドリラはネックと胴との繼目がナポリ型より深く即ちサウンドホールの近くにあるので何れのフレットにも自由に指先を當て得る便がある。之れが此の樂器の特色であらう。

マンドラはマンドリン合奏團には最も貴重の樂器で之れがなくてはマンドリンの合奏に深みがない。マンドラがある爲めに全體の音を驚くべき程豊富にするもので

ある。若し巧妙に弾かれたなら宛然人の歌ふ様に聞えるが然しマンドラの眞の音を得んとするならばEとA絃には巻いた線を使用しなければいけない。マンドラのGの音はマンドリンのGより一オクターヴ低い。之れに關しては米國の作曲者中に大分議論もあつたが伊太利や佛蘭西の有名な作曲者は皆マンドリンのオクターヴ下に書いて居る。第二マンドラのパートも同一のテューニングに書いてあるのでマンドラを最も有効に使用する事が出来る。多くの米國の作曲者は此の樂器の有する音域を有効に使用する事を了解しない爲め高過るか或は低過るかして眞にマンドラに適する様に作曲し得ないのは遺憾である。

伊太利では長年忘れられて居たブレクトラム樂器の價值ある事を近年に至つて心付き遂には樂器製造者も古代リウートを改造して近代型リウートを作るに至つた。近代型リウート即ちマンドロンチエロは形は非常に大きいけれども大體の形狀はナポリ型マンドリンと同じである。昔のリウートは近代型リウートとは其の形もテュー

リングも相違して居る。或るものは絃が八本もある。然るに近代型リウットは五對の絃で四オクターヴの音域を有しバス記號でもトレブル記號でも何れにも演奏し得る。リウットはヴァイオロンチエロの如く深みのある豊富な音を有し且つピツクで演奏せられるものであるからプレクトラム樂器の四部合奏には最も適してゐる。

絃樂（ヴァイオリン族）四部合奏は第一、第二ヴァイオリン、ヴァイオラ及びセロを以て編成せられる様にプレクトラム四部合奏は第一、第二マンドリン、マンドラ及びリウットを使用すれば古の大作作曲家の手に成つた名曲をも演奏し得られるものである。伊太利には斯かるプレクトラム、クワルテットは其數可成あるが就中「クワルテット・ア・プレットロ・フィオレンティノ」はムニエルの率ゐる團體で其の名聲噴々たるものである。

リオラ（キタローネ）もナポリの樂器製造者に依つて新らしく作られたものでマンドリン族のコントラバスである。其の大きさはリウットの半分程更に大きくしたも

ので胴の裏面はギターの如く平たくADGOの太き四絃を有しピツクを以て演奏するのである。（譯者曰。今日ではリオラとキタローネとは全く違つた樂器であるが之も當時は未だ過渡期で一定しなかつたのであらう）

以上列記した通りマンドリン族の樂器はヴァイオリン族と同じ種類の樂器が揃つて居る。即ちヴァイオリン——マンドリン、ヴァイオラ——マンドラ、ヴァイオロンチエロ——リウット、コントラバス——リオラ等である。

近年迄ナポリ型マンドリンにはガット線を用ひ古型のギターの様に木製のベツグが附けられて居たが其の音色が不完全であり且つ絃の壽命が短かいので、現今使用して居る鋼線と機械螺旋とに改められた。之はナポリのマンドリン製造者グイナツチアの先代バスクワレ・グイナツチアが改良したのである。種々の裝飾がある爲に貴重な樂器であると信じて居るが如き我が米國人に向つて伊太利のマンドリン獨奏者は少しも裝飾のない無地の儘の樂器を以て演奏するものである事を知らしむる

のは興味ある事であらう。彼等は決して象眼細工で鑲ばめた安裝飾澤山の楽器は使  
用せぬ。最良の音を出す楽器としてあるのは振動板が松柏類で、胴は楓、ネックは  
塗つた花梨木で作られたものである。伊太利人は楽器の表面を磨くと音色が狂ふと  
云つて艶を出さぬ。楽器を製造するに當つて表面に使用する板の振動及び反響を検  
査するのに音叉を板に當て、振動の持續する時間に依つて其の質の良否と價值を判  
定するのである。最も良い音を發する優れたヴァイオリン、セロ、ギター、チター  
其の他の楽器を作るには何の裝飾をも施さない。何故にマンドリンのみ青貝、鼈甲、  
象牙、セルロイド等を鑲ばめねばならないか。裝飾した楽器は見た處は美麗である  
が其の音色を非常に害なふものである。勿論楽器製造業者としては何等裝飾のない  
楽器は高價に賣る事が出来ぬかも知れぬが、彼等が裝飾に腐心する間に材料の選擇、  
繼目又は仕上げに一層の注意を拂つたなら音楽界にマンドリンの價值を更に高めら  
れ得る事と信ずるのである。

楽器製造業者としても需要あればこそ裝飾の多い楽器を作るのである。伊太利で  
は客の註文により裝飾に數百金をも掛ける製造者が有る。又一面には全然裝飾の無  
いマンドリンを作る者もある。之はソロ・コンサート・マンドリンと稱されて獨奏者  
の特別に註文して作らせるものである。多くのマンドリンの缺點とする處は其の音  
量である。音量が多ければ音の優美の點に缺け可憐な音が生ずれば力に缺ける處が  
あつて双方の美點を合せ持つて居るマンドリンは極く稀である。尙マンドリンの不  
利益な點は絃の選擇が自由でない事である。ヴァイオリニストは伊太利露西亞或は  
獨逸製の幾種類の絃でも己の楽器に適するものを選択して使用する便宜があるがマ  
ンドリンは數多の板片を継ぎ合せて作つた頗るデリケートな楽器で且つ氣候の變化  
に依つて反つたり曲つたりする缺點がある。其の繊弱な楽器に使用するのに絃の選  
擇が限りのあるのは甚だ遺憾な事である。或るマンドリンは細い絃を使用して其の  
能力を發揮し、或るものは稍太い絃が適する場合がある。又獨奏する際には一層太

いD絃とG絃とを要するが之は中々手に入れ難い。A絃を巻線とする事は失敗に終わった。少し續けて彈奏すると巻いた部分が擦り切れて音が冴えなくなるのである。

烈しく彈奏した後にE D G絃は比較的調律が合つて居るが大抵のマンドリンはA絃丈が一本又は二本共シャープになつて居る。ザアイオリンの調子が外れる時には常にフラットとなる。之れは其の絃がガットであるから延びるのである。マンドリンは金屬線であるから收縮してシャープとなる。之を試験するにはザアイオリンを完全に調律して二三週間使用せず其の儘仕舞つて置いて後取出して見るとガット線は凡てフラットとなり金屬線を捲いてあるG丈がシャープとなつて居る。マンドリンで同一の試験をすれば各絃は皆シャープとなつて居る事を發見するであらう。

製造者が如何にネックが堅牢に作つてあると保證しても八本の短い鋼線が固く張られて居るので其の力は却々強いものである。それ故若し獨奏中に一本でも絃の切れた時には残りの一本で曲を奏し終れさうに思はれるが實は一本切れた爲め一層緊張の度が強くなつて各絃は一樣にシャープとなり其の儘演奏を續けることを不可能ならしめるものである。

多くの初學者は己のマンドリンのフレットは正確でないと思つて居るがブリツヂの位置を加減すれば調律は合ふものである。五度或は一オクターヴで合せて見て若しシャープであつたならば先づ各絃を緩めて後ブリツヂをテールピースの方へ即ちサウンドホールより遠去かる様に少しく動かす又反對にフラットならばブリツヂをサウンドホールの方へ少しく動かせば調律は比較的正しくなるものである。尙一つの苦情は絃をフィンガーボードに押付ける時非常に力を要する事である。D絃及びG絃を小指で押す時に殊に甚しい。之れは良い修理者の手に掛ければ修繕し得らるるものである。多くナット(ヘッドとフィンガーボードとの間にある駒)が高過ぎる故に押し難いので其の溝を深くすればよいのである。

ネックの反つたり曲つたりして居る爲に押し難い場合もある。特にネックと胴の

繼目の曲つた時に甚しく押し難い。之等はよく起る事實で常に八本の短い鋼線が緊張して居る事を考へたならば夫れに使用する材料を精選する必要のある事に思ひ當るであらう。フキンガーボードの平であるか否かを検する最もよい方法は第一のフレットと最後のフレットとを押し若し絃が平に各フレットと接して居るならば反つて居ない證據である。

絃を或るフレットの上に押しした時にその音より高い音のする事がある。之れはフレットが眞鍮とか洋銀とか柔かい金属であるから永く樂器を使用して居る間に絃との接觸で磨滅して溝が出来て押しした處より高い方の音が出るのである。第一ポジションでのみ弾いて居る初學者の樂器のE及びA線の七番目迄のフレットは殊に磨滅が甚だしい。之れはフレットを入れ替へれば宜いのである。フレットの餘り高いのは指先に當りグリップサンド等を演出する時甚だ困難を感じるものであるから適度に削り取て後をよく滑かにして置くを可とする。

トレモロが無ければマンドリンは樂器として少しも價值がない。「弓がヴァイオリンの生命である如くトレモロはマンドリンの生命である。即ちピックはマンドリンの舌とも云へるであらう」とベルレンギは云つて居るが眞に同感である。昔はピックに眞珠貝や象牙を使用したのが今日吾人の手にする金属線のマンドリンにはよく磨いて端に丸味のある鼈甲のピックが一番よい音を出すものである。セルロイド、象牙、銀、アルミニウム等で作つたピックは眞の鼈甲で作つたピックより遙か劣つた音しか出せない。ピックの厚さは薄過ぎるよりは厚過ぎるのがよい。初學者は稍もすると指からピックが滑り易いものであるが此の場合に鼈甲のピックならば上の一端を火で焼くと縮れて持ちよくなる。ムニエルは薄いピックを使用すればトレモロが樂に出来ると思ふは間違であると思つてゐる。初めより厚いピックを用ふる様な習慣を付けなければならぬ、手頭を自由に柔く動かす事は休みなき練習に依つて始めて得られるものである。ピックは軽く持つ様に心掛けなければならぬ。之

は最も大切な事で決して力を入れて持つてはならない。ピアノからフォルテに移る時にはピツクを次第に堅く反對にフォルテからピアノに移る時には次第に軽く持つ心持にするとエキस्पレツションの上に非常に効果のあるものである。マンドリン演奏上に最も美しい點は旋律を熟練した歌手の聲に似せて優美と雅致とを以て弾く處にある。

右手をフキンガーボードに近づけて弾けばマンドリンの音は柔かくブリツヂに近づけて弾けば強い音となる。斯の如く加減をすれば演奏上誠に美しい結果を得られるが、初學者は注意せぬと左手も共に動かす憂がある。サウンドホールのブリツヂに近い方の端で弾く時が最も美しい音を出すものである。音の強弱はピツクを持つ指と人差指とを締めたり又緩めたりして加減し得られる。

近年迄世人は一般にマンドリンの音は細いもので演奏會等では他の樂器の伴奏の助を借りなければ聽衆を感動させ得ないものと思ふて居た。然し今ではデュオ奏法

が発見せられて二重音ピツツイカイト、三重音、四重音と各種の奏法が完全になつたので随つて伴奏なしに立派に獨奏する事が出来る。二重音奏法は二絃に亘つてトレモロを使うので可成難しい術であるが骨を折つて研究するに充分價值のあるものである。ガットマンのアレンジになるランゲ作曲「フラワーソング」とザインセント・レオンのアレンジしたフォル作曲「ゼ・バームス」とは二重音奏法として實に模範的の曲である。四重音奏法としてアプト作曲の「サウンド・フロム・ゼ・チャーチ」が良い曲である。抑々此の重音奏法は伊太利で始めて試みられたものであるが現今使はれて居るが如きデュオ奏法は米國に於て完成の域に達したのである。デュオ奏法に依つて巧妙に彈奏せられたマンドリンを聞いた音樂家はマンドリンには會つて夢想だにしなかつた別天地のある事を知る様になつた。

マンドリンを完全に會得するには良教則本と熱心な教師とを得なければならぬ。マンドリンは獨習が出来ぬものであらうかとは常に尋ねられる處であるが「否」

と答へるのみである。獨習は全く不可能な事である。譜に就いてどうにか弾く丈は出来るであらうが、完全なるトレモロを演出する事は教師なしでは出来難い。正確なるピックの使用法は各種の方法に熟達せる教師に就いて學ばなければならない。マンドリンの彈奏を聞いても其の人が永年苦心して練習した事には氣が付く人が尠く、自らも容易に出来るものと思ひ込み、始めて見れば其の容易ならざることに驚くであらう。只數ヶ月の内に上手にならうと考へたならば必ず中途に於て失望するに相違ない。マンドリンは完全に習得するには難しい樂器である。先づ樂器を愛して熱心に練習を續ける外成功の途はない。併せて高級な音樂に對する趣味を養成して眞面目に研究を積まれん事を望むものである。

## 日本訪問記

千八百九十四年（明治二十七年）九月十五日予は横濱に上陸した。そして居留地在住者音樂家の援助の下に同市の公會堂で音樂會を開催したのは十月十三日であつた。此時の入場料は二弗で開會は午後九時。當夜は該地方特有である颶風季最終の可成烈しい暴風雨であつたに拘らず會場は聽衆を以つて満たされた。其中には此地から約十八哩隔たつて居る首都東京からわざわざ來會した日本貴族、米國公使、公使館員等の顔も見えた。

日本人は今や西洋音樂を研究し始めた。横濱のグラランドホテルでは毎夕食事時間中日本人を以て組織せられたプラスチックバンドが演奏を行つて居る。日本人は模倣が非常に巧みで微細な點迄之を眞似るが惜しむらくは獨創と云ふ事に缺けて居る。（但し彼等特有の美術品製作品は例外である）此プラスチックバンドも其西洋曲演奏には何等の



表情なく従つて少しも精神が籠つて居ない。

不思議な事に日本及支那にはピックを以てトレモロで演奏する樂器が見出される。其音調は甲高く騒音を含むて居るが然し彼國の音樂家が演奏するトレモロは眞に確實である計りでなく、又其速度に於て實に驚く可きものが有る。之は一度琵琶の彈奏を聞けば容易に了解し得る事である。此樂器に用ふる撥は木製で長さは六吋半、幅は二吋半で絃に接觸する部分は非常に薄く成つて居、指の間に持たれる部分は幅も厚さも共に一吋の八分の五程である。撥の大體の形狀は細長いV字型であると思へばよい(譯者曰く、之は筑前琵琶の撥を指して居るものと考へられる)即ち此幅の廣い部分が絃を打ち、狭い方が指で持たれるわけで、此一事を以ても日本人は何事に依らず西洋人と反對を取る事が了解されるであらう。何となれば、西洋人は撥の廣い部分を持ち、狭い部分で絃を打つからである。

予が東京で求めた琵琶には四本の絹の絃が附いて居る。フレットは特殊の著け方がしてあつて最初のフレット四個は凸狀をなし次の四個のフレットはマンドリンの如くフィンガーボードの上に各一吋置位に置かれて居る。琵琶の外観は昔時の歐羅巴に於けるリウットに甚だよく似て居る。火藥と印刷術とが支那人の發明に係つて居る以上、吾人が今日愛用するフレット樂器も其源は昔極東の樂人に依つて作られたものではないか。蓋し興味多き研究問題である。

三味線には支那と日本とに依つて種類が異つて居るが何れも先づ相似たもので只支那の三味線にはフィンガーボードに自由に動かし得るナットが附いて居る。兩種共フレットは見られない。絃は絹絲で二本あり、撥を以てトレモロで演奏される。日本人は長さ二吋半、幅約半吋の鼈甲の撥を使用し其一方には一呎半もある房の附いた長い絹紐が附いて居る(譯者曰く、月琴の撥と混同して居る様である)支那のサミセニストは米國の或マンドリンニストの使用する如き三方角のある鼈甲の撥を使用して居る。

東京に於て予は一日テクニツクの非常に難しい三味線のソロを聞いた。勿論吾々西洋人の耳にはメロディは聞き取れなかつたが日本人の聴衆は之に大喝采を浴せた。(譯者曰。大薩摩であらう)此外に満月を象つた月琴と云ふ樂器がある。之れはフレット十個をもつて居て絃は絹の復線二對が掛けられる。絃を巻く爲にはヴァイオリンと等しく木製のベツグがあり、琵琶の如く内部にベルが入つて居る。そして此樂器も亦トレモロで彈奏される。(譯者曰く、アデルスタインは此文の中に日本婦人が月琴を奏で、居る寫眞を掲げて之にジャパニース、マンドリニストの名を與へて居る)

予が日本を去る其日の夕、日本赤十字病院主催の日清戰爭負傷兵士救濟慈善音樂會が催されたが(當時恰も日清戰爭の最中であつた)予は其際高貴の方々の前で演奏する交渉を受けた。そのみならず東京音樂學校よりも招聘を受けたが流浪癖のある予は自分の忠實な友——マンドリン——と共に世界漫遊にと漂然日本を去つたのである。